

# Junior Red Cross Information 2017

No.165

【青少年赤十字指導情報】

特集 1 支援事業

1円玉募金を活用した支援事業が生まれ変わります

特集 2 国際交流

平成28年度青少年赤十字国際交流集会“Tokyo 2016”



Junior Red Cross Information 2017

青少年赤十字指導情報 No.165

日本赤十字社 東京都港区芝大門1丁目1番3号  
TEL. 03-3437-7082 FAX. 03-3432-5507 <http://www.jrc.or.jp/>



人間を救うのは、人間だ。

Japanese Red Cross Society

## Junior Red Cross Information

2017.4.1 No.165

青少年赤十字指導情報

※本誌の内容は、原則として2017年3月31日時点のものです。

## TOP MESSAGE

「V・S 茂木っ子チームに入るのが楽しみです！」

青少年赤十字全国指導者協議会  
会長 田川 雅裕

表題の言葉は、4月の始業式での児童代表の言葉です。この言葉を聞いた私の心の中はといふと、「嬉しい」ではなく「困った」というものでした。平成27年度からJRCに全校加盟をして、その9月に「V・S茂木っ子チーム」を立ち上げました。まだ、V・S活動が根づいていない本校で、核となる児童の組織がほしかったからです。

校長直轄の組織なので、校長の思いをストレートに児童に伝え、すぐに実行に移せるありがたい組織です。しかし、いつまでも校長直轄でしているわけにもいかず、JRC担当の職員と相談して、その年度からはチームの活動内容を委員会活動として行うことに決めていたのです。「どうしよう」私と担当職員は顔を見合せました。

結局、子どもたちの思いを優先して、チームを立ち上げることにしました。現在、18名で活動しています。

JRC活動を学校教育に取り入れるには、さまざまな方法があると思います。前述のチームの

※V・S：ボランタリー・サービス（Voluntary Service）の略。ボランタリー・サービスとは、誰から命じられることもなく、相手の立場に立って必要なことを自らから進んで行う奉仕活動のことです。青少年赤十字ではこれをV・S活動と呼んでいます。子どもたちが自ら問題を発見し、その解決策を考え実行するプロセスの中で、自発性や協調性、体系的な考え方を育みます。

# 1円玉募金を活用した支援事業が生まれ変わります

—青少年赤十字海外支援事業—

## 子どもたちが活動の中心となる1円玉募金

青少年赤十字では、平成16年から「子どもたちが自分たちのお小遣いの中から出せる金額で奉仕をしよう」という目的で、「青少年赤十字活動資金(通称「1円玉募金」)」を活用した支援事業を開始しました。

世界で苦しんでいる同世代の子どもたちのために、日々のお小遣いを優先して募金活動に参加することによって「奉仕」の心を学び、その国の文化や生活に関心を持ち、自ら調べることで「国際理解・親善」を深めます。1円玉募金の特徴は、その国の学校の先生や地域住民、行政等が一緒にやって募金の使い道を考え、その国が本当に必要な形で活用してもらえる点です。

平成27年12月に、これまで12年にわたる支援対象国はモンゴル、ネパール、バングラデシュが終了し、平成29年4月から、新たにネパール、バヌアツに対する支援青少年赤十字海外支援事業が始まります。事業の目的や成果をより明確にするため、「防災・災害対応」「衛生」という、日本赤十字海外支援事業は学校教育を通じた支援となりますので、子どもたちが活動の中心になり、主体的な扱い手として事業に貢献することができます。

\*1円玉募金の開始は昭和34年です。

川越市立川越小学校  
川越市立川越小学校は、旧川越藩が開いた塾を基とする伝統校。また、JRC 加盟の歴史も長く、「1円玉募金」の活動を継続的に行っています。

川越市立川越小学校  
900名以上の児童が通う世田谷区立山野小学校。海外の子どもたちを支援する活動を学校全体で進めるため、平成28年から青少年赤十字に参加しました。

### 1円玉募金に取り組む学校の紹介



#### JRC委員会の児童が中心に活動

##### 川越市立川越小学校

同校では5~6年生のJRC委員会の児童たちが「1円玉募金」を担当。月に一度、始業前に1年~6年生全ての教室をまわって募金を集め、責任を持って集計しています。小池校長とJRC委員会の児童2名にお話をうかがいました。



小池 幸 校長

長年にわたり「1円玉募金」を続けている本校では、熊本地震や地元・川越の菓子屋横丁の火事があった際も、独自に募金活動を実施しました。皆が幸せに暮らせる社会をつくるために自分に何ができるか……。募金という行為は子どもたち一人ひとりが考えるきっかけとなっているようです。



JRC委員会委員長  
有村 華奈さん(6年)

「1円玉募金」をやっていていちばんうれしいのは、下級生のみんなが困っている人のために積極的に募金に協力してくれることです。



JRC委員会副委員長  
横田 弥瑛さん(6年)

募金を通して今まで知らなかったネパールやバヌアツという国についてもっと知りたくなりました。

#### 国際理解のために募金活動を開始

##### 世田谷区立山野小学校

同校では2016年12月9日から13日の間、国際理解委員会の児童が中心となり募金活動を実施。それに先立ち、12月8日に朝の会で全校児童に向けて募金の呼びかけを行いました。菊地先生とJRC委員会の児童2名にお話をうかがいました。



菊地 朋子先生

「1円玉募金」への参加は今回が初めてです。今年から立ち上がった国際理解委員会の取り組みの一環として行うのですが、「国際理解・国際協力」の方法として子どもたちから意見が挙がったのが募金活動でした。とくに「1円玉募金」は、その対象や国の状況等が目に見えて分かりやすく、また1円玉ということで身近に行える国際協力であることが良いですね。



古性 大和さん(6年)

「1円玉募金」を通して、災害などで苦しんでいる子がいるということを全校児童に知らせたいと考えています。



相原 茉南さん(6年)

驚いたのは、日本では考えられないけれど、衛生環境が整っていないことで病気になる子どもたちがいるということです。そうした人たちのお役にたてればいいと思います。

### ネパール バヌアツ

ネパールは、ヒマラヤ山脈を有する平地の少ない山岳の国です。そのため、上下水道などの整備が遅れており、とくに山岳部の村々では衛生状態が十分とは言えない状況です。不衛生な環境の中での下痢症に悩まされることが多く、5歳未満児の死亡につながる一因ともなっています。トイレや水道設備の整備が急務となっています。

### 1円玉募金のゆくえ(ネパール)

ネパール赤十字社を通じて、子どもたちが衛生的な行動を身に付ける知識と技術を得、家庭やコミュニティに普及することをめざした支援を実施します。



### 1円玉募金のゆくえ(バヌアツ)

バヌアツ赤十字社が、バヌアツの教育省との協定を結び、公的に学校における災害リスクの軽減や防災の正しい知識を得る環境を整備すること等を目的とした支援を行います。



啓発・教育  
先生、生徒に対する水と衛生プログラム研修を実施(子どもから地域へ)



環境改善  
性別や年齢、障害に配慮したトイレや手洗い場の整備



環境改善  
水に起因する感染症に関するミーティングを実施



防災への取り組み  
小学校のカリキュラムに防災減災ツールを組み込む



防災への取り組み  
対象校の先生、生徒が基本的な救急法を受講する

1円玉募金を使った海外への支援事業は、今年から対象国等が変わり、新たな形で再スタートします。ネパール・バヌアツを対象とした支援事業の概要と、1円玉募金を実施する小学校の活動についてご紹介します。



初めて来日する若者がほとんどでした。しかし、閉会式が近づく頃になると、初めて来日する若者がほとんどでした。た。

来日した海外メンバーたちは防災先進国である日本での経験を通じてさまざまな防災知識を習得し、自分の国や学校にその成果を伝えいくことを使命としています。また、10月末に来日して日本全国の支部を訪問し、ホームステイを体験。11月3日より日本の高校生と合流して、3泊4日の日程でホームルームごとのフィールドワーク、ディスカッションを行い、その成果を全員の前でプレゼンテーションしました。

防災先進国・日本で学ぶ  
「防災教育」  
ショーンとプレゼンテーションを行います。

通算30回目を迎えた今回のテーマは「防災教育」でした。アジア・大洋州では台風(タイフーン)や洪水をはじめ、日本と同じく地震や津波といった自然災害によって大きな被害を受けている地域が少なくありません。さらに太平洋の島々における深刻な海面上昇の危機など、気候風土や地域ならではの自然災害もあります。

「平成28年度青少年赤十字国際交流集会“Tokyo 2016”(以下、国際交流集会)は、アジア・大洋州地域内の21の国・地域から来日した若者と日本の高校生との相互理解と親善を目的に開催されています。

国際交流集会には、日本各地の高校生とアジア・大洋州の若者(海外メンバーたち)が集まり、8人前後のグループ(ホームルーム)に分かれ、各テーマに沿ったディスカッショ

ンとプレゼンテーションを行います。

2016年11月3～6日、日本赤十字社は、東京・国立オリンピック記念青少年総合センターで「平成28年度青少年赤十字国際交流集会“Tokyo 2016”(後援:文部科学省)」を開催しました。

“Tokyo 2016”  
① 8:30～13:30 「防災」をテーマにしたディスカッション  
プログラム  
② 13:30～16:00 ディスカッションの発表  
11月5日(土)  
③ 18:15～20:45 文化交流(民族衣装での舞踊 他)



初対面ながらすぐに友だち同士に

時にはボディランゲージを交えて



フィリピン  
Danica Joyce  
Balodo SILAGAN さん



中国／東京都  
陳 麗帆さん



モンゴル  
Anand Burte  
Borjigin  
MENDSAIKHAN さん



バングラデシュ  
Farhana  
HAIDER MIN さん



京都府  
和崎 真子さん



トンガ  
Paula Lolo  
TUITUPOU さん

**防** 災はフィリピンでも重要な問題です。日本と各国の若者たちと意見交換ができる国際交流集会は、私にとって非常に有意義な経験となりました。また、福島でのホームステイも忘れられません。当初は原発事故後の福島に対する不安を感じていました。しかし、実際に足を運ぶと、そこには豊かな自然があり、安全に暮らしている優しい住民の方々がいました。帰国したら自分の目で見た「福島の今」を伝えたいと思っています。

**私** は上海生まれ。4年前に父の仕事の関係で来日し、現在は東京の高校で学んでいます。今回は「東京都代表」としてこの国際交流集会に参加しました。初日はかなり緊張していたのですが、「伝えたい」という気持ちさえあれば、たとえ「違う」文化の人たちにだって自分の意思は伝わるし、わかり合えます。3泊4日という短い期間でしたが、濃密な時間を過ごした仲間たちと出会い、語り合えたことがなによりの収穫でした。

**国** 際交流集会は日本や各国の仲間にモンゴルを知ってもらう絶好のチャンス。だから私たちのホームルームのディスカッションでは、モンゴルならではの寒雪害「Dzud(ヅド)」をテーマに加えてもらいました。日本の高校生たちが活発に質問し、意見を述べてくれてとても嬉しかったです。今回学んだ防災知識は、帰国したら多くの友人たちと共有するつもりです。そして大好きな日本に、いつか再び訪れたいと思っています。

**私** の国バングラデシュは、サイクロンや洪水被害など、頻繁に自然災害に悩まされており、そのたびに日本政府や日本赤十字社が手をさしのべてくれました。私は将来医師になって、こうした災害支援への貢献がしたいと考えています。今回、日本や各国の仲間たちとともに真剣に議論しました。ここで学んだ防災に関する知識や被災地支援のマネジメントについて、自国に持ち帰ってさらに深く考えていきたいと思っています。

**国** 際交流集会は、自分が英語でどれだけコミュニケーションできるかを試す大きなチャンス。宿舎も海外の学生たちと同室で、存分に英語でのコミュニケーションを楽しみました。また、海外の学生たちの積極性にも大きな刺激を受けました。日本人にくらべて好奇心旺盛で、自分たちの国のことや意見を堂々と話す彼らの姿を見ていると、いつか自分も海外で堂々と日本文化を発信できるような人になりたいと心から思いました。

**異** なる文化で育ってきた者同士が、英語を使って、時にはジェスチャーを交えて、お互いの意見を交わすことはほんとうに楽しく有意義な経験でした。毎日のプログラムで学んだことは、毎晩必ず寝る前にノートにまとめてから寝るようにしていました。私は将来、小さい子どもたちを教える教員をめざしていますが、このノートをベースにトンガの子どもたちに災害に対する正しい知識と対処法を伝えてあげたいと思っています。

# 平成28年度 青少年赤十字 国際交流集会

## JRC/RCY International Meeting Tokyo 2016

うか。  
あらわしているのではないでしょ  
うか。  
葉が、この濃密な時間の意義をよく  
文化で育った人たちにだって意思  
は伝わるし、わかりあえる」との言  
ふれる笑顔と別れの涙の中で大団  
円を迎えるました。

ほんの数日前まで、異なる国で育  
ちまったく他人だった者同士が、将  
来の再会を誓い、別れの涙を流すほ  
どに心と心を通わせるまでになっ  
た3泊4日の経験。

ある日本の高校生が語った「伝え  
たい気持ちがあれば、たとえ異なる  
文化で育った人たちにだって意思  
は伝わるし、わかりあえる」との言  
葉が、この濃密な時間の意義をよく  
あらわしているのではないでしょ  
うか。

## 日本から海外へ

体験談



### オーストリア赤十字社プログラム

オーストリア赤十字社主催「第61回INTERNATIONAL STUDY AND FRIENDSHIP CAMP 2016」が、7月11日(月)～25日(月)の期間、オーストリア北部のランゲンロイースで開催されました。日本からは高校3年生の岡安美幸さんが参加。ワクワクドキドキのプログラムの様子をレポートしてくれました。

私にとってオーストリアで各国のメンバーと一緒に生活したこの2週間は、かけがえのない特別なものとなりました。

事前準備では、自力でオーストリアに行き無事に日本に帰ってこられるのかと不安になりました。でも、うまくできることもありました。

ナショナルパブでは、肉なし肉じゃがを作ろうと、春雨と醤油を日本から持って行きました。実際に作ってみると、砂糖や人参の違いで味や食感がうまく再現できず、がっかりしたのですが、慣れ親しんだジャガイモの珍しい味付け、ということでみんなには気に入ってくれました。また、Festival of Nations(学園祭)ではこんなこともあります。今回、creative artsという部門に参加したのですが、ゲストにあげるギフトについて話し合ってたときに、折り紙のバラはどうかと提案しました。試しに一つ作ってみると好評で、ギフトは折り紙のバラと粘土の赤十字マスコットに決まり、私は4時間で100個のバラを折りました。さらに、プレゼンテーションでは、日本の書道パフォーマンスを見てもらおうと、筆や墨汁、半紙などを持って行きました。初めて目に見る人ばかりで、とても感激してもらいました。多くのゲストの方から声をかけていただけただけなく、ベストプレゼン賞もいただきました。最も悩んだことだったので、成功して嬉しかったです。

マウトハウゼン強制収容所では、オーストリアから見た第2次世界大戦を知ることができたし、あるときはソマリア難民になってオーストリアに逃げるという街全体を使ったロールプレイングゲームも体験しました。このスリルはもう二度と体験できないであろう、と最も衝撃的な思い出となりました。もちろん赤十字についても学び、紛争より災害の方が重いという国柄の違いを感じました。

このような機会を私に与えてくださり、本当にありがとうございました!!



写真左が岡安さん



山形県私立  
鶴岡東高校教諭／国語  
古原 大樹先生



色とりどりの民族衣装をまとった参加者が歌や踊りを交えたパフォーマンスを披露。会場は大いに盛り上がりました



ディスカッションの結果をまとめたら、グループごとに工夫を凝らして全員の前でプレゼンテーション



福島県立  
福島東高校教諭／地学  
松本 仁子先生



埼玉県さいたま市立  
浦和高校教諭／英語  
岡安 一之先生



佐賀県  
谷口 稔徳さん

**海** 外の学生と議論するためには、自分のオピニオンをしっかり持ち、それを論理的に説明する能力がないと文字通り「話」になりません。国際交流集会では日本の高校生たちがこのことに気づき、「理解してもらいたい」という切実な思いの中で、繰り返しディスカッションのマインドとスキルを磨いています。語学力だけではない、グローバルなコミュニケーション能力を身につけるためにこれほど有効な場は他にありません。

**国** 国際交流集会には、英語教員以外でも参加できるようになってから何度も参加しています。今回は防災がテーマで、私の担当教科である地学の知識を活かせる「地震」についてのディスカッションとプレゼンを行いました。日本と海外の学生たちの交流は、将来、各国との外交関係の発展のための布石にもなると思います。私自身もこのイベントから毎回多くのことを学ばせてもらっており、ぜひ末長く続けてほしいと願っております。

**僕** は英語が大の苦手。せめて積極性では誰にも負けないように頑張ろうと思い、他の学生たちと活発にコミュニケーションを図りました。ホームルームの仲間と取り組んだ防災のプレゼンテーションでは、達成感のあまり生まれて初めて感激の涙を流しました。最終日には、日本各地と世界各国の仲間たちと、まさに心と心でつながっていることを実感。今回の経験を通して、自分が人間としてステップアップできたような気がしています。

と「日本の高校生はみんなフレンドリーで楽しかった」「美しい自然や親切な人々と接して、いっぺんに日本のことが好きになりました」「機会があればぜひまた日本を訪れたい」と多くの日本ファンが生まれていました。

## 心が通じ合う 3泊4日の濃密な時間

一方、日本の高校生たちは学校での青少年赤十字活動に力を入れて、メンバーや、各都道府県の日本赤十字から選ばれました。トレーニングセンターに参加経験がある生徒が多かったのですが、ほぼ全員が外国人とのグループワークは初めての体験。最初は少々緊張している様子でしたが、「英語を使って、自分がどれだけコミュニケーションできるかを試せた」「文化の違いは乗り越えられると感じた」「英語が苦手だけど、最後は気持ちで通じ合えた」など、世界への視点を養いながら、それぞれの成長を実感できたようでした。

高校生と海外メンバーに加え、各ホームルームのファシリテーター役である高校教員、通訳など「コミュニケーションのお手伝いをする」語

## 日本から海外へ

体験談

### オーストリア赤十字社プログラム

オーストリア赤十字社主催「第61回INTERNATIONAL STUDY AND FRIENDSHIP CAMP 2016」が、7月11日(月)～25日(月)の期間、オーストリア北部のランゲンロイースで開催されました。日本からは高校3年生の岡安美幸さんが参加。ワクワクドキドキのプログラムの様子をレポートしてくれました。

私にとってオーストリアで各国のメンバーと一緒に生活したこの2週間は、かけがえのない特別なものとなりました。

事前準備では、自力でオーストリアに行き無事に日本に帰ってこられるのかと不安になりました。でも、うまくできることもありました。

ナショナルパブでは、肉なし肉じゃがを作ろうと、春雨と醤油を日本から持って行きました。実際に作ってみると、砂糖や人参の違いで味や食感がうまく再現できず、がっかりしたのですが、慣れ親しんだジャガイモの珍しい味付け、ということでみんなには気に入ってくれました。また、Festival of Nations(学園祭)ではこんなこともあります。今回、creative artsという部門に参加したのですが、ゲストにあげるギフトについて話し合ってたときに、折り紙のバラはどうかと提案しました。試しに一つ作ってみると好評で、ギフトは折り紙のバラと粘土の赤十字マスコットに決まり、私は4時間で100個のバラを折りました。さらに、プレゼンテーションでは、日本の書道パフォーマンスを見てもらおうと、筆や墨汁、半紙などを持って行きました。初めて目に見る人ばかりで、とても感激してもらいました。多くのゲストの方から声をかけていただけただけなく、ベストプレゼン賞もいただきました。最も悩んだことだったので、成功して嬉しかったです。

マウトハウゼン強制収容所では、オーストリアから見た第2次世界大戦を知ることができたし、あるときはソマリア難民になってオーストリアに逃げるという街全体を使ったロールプレイングゲームも体験しました。このスリルはもう二度と体験できないであろう、と最も衝撃的な思い出となりました。もちろん赤十字についても学び、紛争より災害の方が重いという国柄の違いを感じました。

このような機会を私に与えてくださり、本当にありがとうございました!!



写真左が岡安さん



山形県私立  
鶴岡東高校教諭／国語  
古原 大樹先生



色とりどりの民族衣装をまとった参加者が歌や踊りを交えたパフォーマンスを披露。会場は大いに盛り上がりました



福島県立  
福島東高校教諭／地学  
松本 仁子先生



埼玉県さいたま市立  
浦和高校教諭／英語  
岡安 一之先生



佐賀県  
谷口 稔徳さん

**海** 外の学生と議論するためには、自分のオピニオンをしっかり持ち、それを論理的に説明する能力がないと文字通り「話」になりません。国際交流集会では日本の高校生たちがこのことに気づき、「理解してもらいたい」という切実な思いの中で、繰り返しディスカッションのマインドとスキルを磨いています。語学力だけではない、グローバルなコミュニケーション能力を身につけるためにこれほど有効な場は他にありません。

**国** 国際交流集会には、英語教員以外でも参加できるようになってから何度も参加しています。今回は防災がテーマで、私の担当教科である地学の知識を活かせる「地震」についてのディスカッションとプレゼンを行いました。日本と海外の学生たちの交流は、将来、各国との外交関係の発展のための布石にもなると思います。私自身もこのイベントから毎回多くのことを学ばせてもらっており、ぜひ末長く続けてほしいと願っております。

**僕** は英語が大の苦手。せめて積極性では誰にも負けないように頑張ろうと思い、他の学生たちと活発にコミュニケーションを図りました。ホームルームの仲間と取り組んだ防災のプレゼンテーションでは、達成感のあまり生まれて初めて感激の涙を流しました。最終日には、日本各地と世界各国の仲間たちと、まさに心と心でつながっていることを実感。今回の経験を通して、自分が人間としてステップアップできたような気がしています。

# 「まもるいのちひろめるぼうさい」活用で 広がる防災教育の可能性

日本赤十字社は、児童・生徒が自然災害の学習と対策について主体的に取り組むための、授業で使えるプログラム「まもるいのちひろめるぼうさい」を平成27年に作成し、全国の小中高校に無償提供しています。教育現場でのさまざまな活用例について紹介します。

## 「まもるいのちひろめるぼうさい」活用で 避難訓練と防災教育を セットで行い実践的な教育に

愛知県春日井市立不二小学校



### 東日本大震災後に高まる 「防災教育」の機運

愛知県では、校務主任という学校分掌があり、校内の施設や備品の管理などとともに、避難訓練を含む「防災」も担当しています。私は平成27年度、この校務主任を務めました。



上田 博正先生

防災教育の授業



青少年赤十字防災教育プログラム  
「まもるいのちひろめるぼうさい」



春日井市内52校の校務主任が集まる研究会があり、近年は「防災教育」が重要なテーマとなっていました。かつての小中学校では、防災教育と言つても、昔ながらの避難訓練のみという学校がほとんどでした。しかし特に東日本大震災後、もっと実践的な防災教育のプログラムが必要ではないかという意見が強くなり、独自に防災教育のテキストを作成することも検討されました。特にDVD映像のインパクトは強く、子どもたちが引き込まれていくを感じました。また、たとえば、地震の際に危ないものを「たおれてくるもの」と「おちてくるもの」「うごいてくるもの」という子どもにとって理解しやすい3つの柱にまとめてくれたのが、教える側としても大変に有り難かったです。

実際の授業では授業時間に即して教える内容を削ったり、本校の実態に沿ってワークシートを作り直したりしましたが、「まもるいのちひろめるぼうさい」は確かに継続的に実施して、各校の防災教育プログラムとしてしっかりと定着させていくかが私たち教員に問われていると感じています。

## 津波被害から身を守る 授業を実施

福井県福井市立国見中学校



### ワークシート等を 活用し避難方法を シミュレーション



ワークシートを活用した授業の様子

緊急地震速報音を使った事前学習

## 自然の恵みへの感謝の気持ちと 自ら命を守る力を育てる防災教育

福島県猪苗代町立吾妻小学校



### 災害の特徴を理解し 映像教材を活用し

雄大な磐梯山と猪苗代湖のある自然豊かな猪苗代町。磐梯山や安達太良山などの火山に囲まれている猪苗代町立吾妻小学校は、福島県教育委員会から平成28年度「生き抜く力を育む防災教育推進事業」の実践協力校に指定されました。「地域の自然のすばらしさを知り、災害に関する正しい知識を身に付け、自らの命を守るために主体的に考え判断し行動できる力を身に付ける」ことをめざして、防災教育担当の渡邊康貴先生を中心に取り組んでいます。

福井県の県庁所在地である福井市。国見中学校は市内の北西に位置します。国見地区は震度5以上の地震が発生した場合、11分で5・8メートルの津波が来ることが予想されており、海拔3・6メートルの位置にある同校は津波の被害を受ける恐れがあることが分かつています。そのため、避難訓練など災害対策も盛んに行つきました。そして平成26年度、日本赤十字社福井県支部より青少年赤十字活動推進校の指定を受け、防災教育に関するさまざまな取り組みを進めています。「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使った授業としては、平成26年12月に道徳で写真教材「避難所でのストレスを考えてみよう」を活用。被災地から自宅に帰った家族の様子を提

示し、生徒同士のグループワークを通じて課題についての考察を進めました。また、大規模地震想定避難訓練事前指導での活用として、「地震災害」ワークシート1「地震から身を守ろう」を使用し、学校外のさまざまな場面を想定しながら避難方法をシミュレーションしました。災害教育担当の池田先生は、「生徒の感想を聞くと『被災地の人たちの気持ちがわかるようになった』『もし災害が起きたら自分が家族、地域の人たちの命を守れるようになりたい』といった声が多く、防災教育の重要性を改めて感じました」と答えくださいました。



池田 瞳美先生

授業では、学習内容や実態に応じて、プログラムに収録されているデータ集や映像教材を活用。2年生の学級活動では、



映像教材などを活用した授業の様子(上)(右)

「地震災害」(1~3年用)指導案を参考に、家に一人でいるときに地震が発生した場合の身の守り方について学習指導案を作成、実践し、映像教材「じしんからみをまもろう」などを授業で活用しました。また、5年生の総合的な学習の時間の単元「磐梯山の噴火と恵み」では、火山防災マップをもとに、避難の仕方を考えた上で、映像教材「火山を知ろう」を視聴し、情報を確認することの大切さを学習しました。さらに全校生で取り組む避難訓練の事前指導にも映像教材を活用しています。



渡邊 康貴先生

平成28年度には、本校を含めて春日井市の20校以上の小学校がこの教材を使った授業を実施したと聞いています。

## 学校全体の取り組みとして いかに継続していくかが課題

本校では、平成28年7月に5年生を対象にした防災教育の授業を実施し、夏休み明けの9月に行われる避難訓練につなげました。子どもたちの反応はとても良かったです。特にDVD映像のインパクトは強く、子どもたちが引き込まれていくを感じました。また、たとえば、地震の際に危ないものを「たおれてくるもの」と「おちてくるもの」「うごいてくるもの」という子どもにとって理解しやすい3つの柱にまとめてくれたのが、教える側としても大変に有り難かったです。

青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのちひろめるぼうさい」



# 導入してみよう！

# グループワーク

アクティブラーニングの考え方に基づく「新しい学び」が求められている教育現場。児童・生徒が一つの課題に協働して取り組むグループワークはその中心的な手法で、青少年赤十字のプログラムでも活用されています。そこで、名古屋市で日本体験学習研究所を主催する津村俊充南山大学名誉教授にグループワークに取り組む心がまえや留意点、授業を進めるコツについてお話をうかがいました。



一般社団法人 日本体験学習研究所 代表理事・所長 津村 俊充さん  
現南山大学名誉教授。名古屋大学大学院教育心理学専攻博士課程前期修了。教育学修士。日本教育心理学会学校心理士。2011年に、日本人初のNTL Instituteメンバーに認定。

みんなで  
はじめよう！



一般社団法人 日本体験学習研究所

70年ほどの長い歴史をもつ米国NTL Instituteの理念と学習方法を大切にした教育・研究機関。各種研修や公開講座、教材開発、研究会、コンサルテーションなどの活動を幅広く展開している。  
<http://jiel.jp/>

※NTL：米国でクルト・レヴィンが創始したT(トレーニング)グループをはじめ多数のプログラムを提供しているラボラトリー教育の世界的な機関。

## どれだけ「起こっていること」に 気づけるかがグループワークの肝

「関係の中で学ぶグループワーク」

人の行動は「場」に左右されます。グループに身を置いたとき、集団の中で生まれる力学というものに影響を受け行動します。つまり個人は集団から影響を受けると同時に、集団に影響を与える存在でもあります。

私たちはグループワークにおける「コミュニケーション」と「プロセス」という2つの概念を使って説明しています(図1)。

「コミュニケーション」とはグループで実際に話し合われているテーマや内容のこと。

グループの中で「言葉」として発せられることと、起こっていること(ダイナミクス)。グループワークではまずこの二つの違いをしっかりと覚えることが重要になります。

たとえば、この取材で聞き手の皆さんは私の話に何度も相づちを打っていただけいますが、心の中では「津村って人はやけに話が長いな」と思われたかもしれません(笑)。一方私はカメラマンの方に「」の角度で写真を撮ってもらえたといいます(図1)。

「コミュニケーション」とは、自分は動けなかったのか?と子どもたちが内省・分析してみることのできる「プロセス」です。そこで先生がうまくヒントを与えてあげると、その子の学びの体験はより深いものになるはずです。

きれば、もっと親密で安心な関係が築けるかもしれませんか?

授業でのグループワークも同じです。どれだけ多く言語化されないプロセスに気づくことができるかが重要です。個人差はありますが、こうした気づきの能力は書物やネットで調べたりするだけではなかなか身につかないかもしれません。実際に現場で試行錯誤するか、勉強会・研修など実地に近い状況でトレーニングするのが効果的でしょう。

## ステップアップする学びのために 「体験学習の循環過程」を実践

プロセスにおける気づきはグループ

ワークの出発点もあります。図2をご覧ください。グループワークを「体験」し、先生と児童・生徒がそれぞれそこで何が起きたのかに気づき、「指摘」。さらには起きたのかを検討し、「仮説化」する。こうして循環を回してステップアップさせるのも先生(ファシリテーター)の役割です。

ここで留意していただきたいのは、ファシリテーターとして関わる先生という立場は、生徒一人を操作する怖れのある立ち位置にいるということ。これは私自身もいつも自戒していることです。

ファシリテーターは目の前の児童・生徒を尊重して関わりを持つべきです。指導が熱心なあまり、指示・命令してしま

うこともあるでしょうが、グループワークでは、児童・生徒が学びの目標を見つけ出し、そこにたどり着けるように支援する姿勢が大切なことです。

また、グループワークの場でどうして児童・生徒を「動かす」「話させる」ことに集中してしまう先生も少なくないでしょう。しかし、「動けない」「話せない」というのも重要な「プロセス」であり、「なぜ自分は動けなかったのか?」と子どもたちが内省・分析してみることのできる教育チャンスです。そこで先生がうまくヒントを与えてあげると、その子の学びの体験はより深いものになるはずです。

## グループワーク実践例



愛知県立  
豊田北高等学校  
(JRC加盟校)  
立岩 沙和子先生

## 高校生の生きる力を育みたい



図1 「コンテンツ」と「プロセス」  
グループワークでは言語化、可視化されているものはほんの一部に過ぎない。



図2 体験学習の循環過程  
青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」に通じるものがある。



津村教授が研修で用いるグループワーク用の学習ゲームを行う様子。各人にカードで配られた限定的な個人情報から、マンションの住人の部屋やプロフィールを明らかにしていくという内容になっています。

それに対し「プロセス」とは、そのグループ構成員の相互関係によって生じるグループ・ダイナミクスを指します。発言が、構成員それぞれにどのように影響を与え、心の中で何が生じているのか……。こうしたことは可視化・言語化されるわけではありません。しかしグループの中で起きている「プロセス」に気づかなければグループワークの効果は期待できません。「コンテンツ」と「プロセス」はまさに表裏一体の関係にあります。

# クラウドファンディングでの地域貢献をめざして

JRC加盟校である佐賀県立唐津東高等学校の科学部は、佐賀大学農学部と連携し、国産初のグレープフルーツ「さがんルビー」を使ったサイダーなどの開発を行い、注目を集めています。地域活性化にもつながるこうした活動を開催する部員一人にお話を伺いました。

## 佐賀の新しい特産品をもっと知りたいから



究を始めました。

「さがんルビー」は、佐賀大学農学部が研究開発し、全国で初めて品種登録された国産グレープフルーツです。淡いピンク色の果肉とやや強い酸味が特色で、食べるときわめてビターな香りが口の中に広がります。唐津東高等学校科学部の江口可那子さんと永野悠希さんは(いずれも2年生)は、1年生の時から高校の近くにある佐賀大学農学部附属アグリ創生教育研究センター(唐津キャンパス)に通って、この「さがんルビー」の研究を始めました。

「さがんルビー」の研究を繰り返すメンバーと打ち合わせ(下)。佐賀大学農学部の見学に連れて行ってもらったことでした」と話す永野さん。彼女は科学部で水口ケット(水と圧縮空気で飛ばすペットボトル口ケット)の活動も行っており、なんと日本代表として海外で行われた大会にも出場。「実験が大好き!」という生粋の理系女子です。

「大学を見学しながら、永野さんと私は、地元産のグレープフルーツにすっかり興味を持つて、山口先生に『さがんルビー』の研究がしたいとお願いしました。先生はやる気さえあれば、私たちが興味を持つたことを自由にやらせてください」と続けてくれたのは江口さん。科学部員ながら将来は英語を専攻したいという文系女子で、永野さんと同じ中学校出身です。

二人は大学との共同研究を通して「さがんルビー」の魅力を知るにつけて、この地元の新規事業を広げた

新しい名産品を、もっと全国の人に知つてもうえないかと思うようになりました。

「思いついたのは『さがんルビー』の

素晴らしさを知つてもうえる製品づくりです。そこで、まずはサイダーの研究開発に取り組みました。果汁は自分たちで絞り、大学に協力いただいて試作品が完成。グレープフルーツジュースにありがちな苦みがほとんどなく、とても飲みやすいサイダーができました。うれしかったですね」(江口)

がほとんどのく、とても飲みやすいサイダー

がほとんどのく、とても飲みやすいサイダーができました。うれしかったですね」(江口)

がほとんどのく、とても飲みやすいサイダー

がほとんどのく、とても飲みやすいサイ



「まもるいのち ひろめるぼうさい」撮影の様子

全国の小・中・高等学校の授業などで活用されている青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」。伊藤歩さんは、その映像教材にナビゲーターとしてジャーナリストの池上彰さんとともに出演されています。

東日本大震災直後から、第二の「ふるさと」岩手・大船渡で個人として支援活動をされていたという伊藤さんに、女優というお仕事と防災への思いについてうかがいました。

**初のニューヨーク生活で女優としてのやりがいをみつけた**

母の実家は岩手県大船渡市。生まれも育ちも東京の私にとって、自然がいっぱい優しい祖父母がいる大船渡は、「ふるさと」といえる場所かもしれません。

私が女優という仕事をしているのも、若い頃に俳優志望だった祖父の熱心な勧めがあったから。とはいっても13歳で女優デビューをした後も、仕事はほとんど数年に一度の映画出演だけなので、公立の中学校から高校とごく普通に学校生活を楽しんでいました。

転機は高校卒業後、語学留学したことでした。このまま女優を続けるかどうかの迷いもありました。何をするにせよ、まず英語をしっかり身につけたかった。そこで映画出演などでコツコツ貯めたお金を使ってニューヨークに渡りました。

**東日本大震災で祖母が被災**

私が女優の仕事をすることをとても喜んでくれた祖父は、2010年に亡くなりました。一人暮らしになつた祖母も介護が必要で、私は口の合間や休みを利用してたびたび大船渡を訪れていました。実は、東日本大震災の2日前、2011年3月9日まで祖母と一緒に大船渡にいたのです。

3・11直後は祖母と連絡が取れず、とても不安でした。1週間ほどしてなんとか現地に入ることができ、祖母の無事を確認。家の前には津波で運ばれた瓦礫が押し寄せ、言葉が出ないほどの大きな衝撃をうけました。

「まもるいのち ひろめるぼうさい」撮影の様子

東日本大震災で祖母が被災

私が女優の仕事をすることをとても喜んでくれた祖父は、2010年に亡くなりました。一人暮らしになつた祖母も介護が必要で、私は口の合間や休みを利用してたびたび大船渡を訪れていました。実は、東日本大震災の2日前、2011年3月9日まで祖母と一緒に大船渡にいたのです。

3・11直後は祖母と連絡が取れず、とても不安でした。1週間ほどしてなんとか現地に入ることができ、祖母の無事を確認。家の前には津波で運ばれた瓦礫が押し寄せ、言葉が出ないほどの大きな衝撃をうけました。

**テレビの力を実感**

私が女優の仕事をすることをとても喜んでくれた祖父は、2010年に亡くなりました。一人暮らしになつた祖母も介護が必要で、私は口の合間や休みを利用してたびたび大船渡を訪れていました。実は、東日本大震災の2日前、2011年3月9日まで祖母と一緒に大船渡にいたのです。

3・11直後は祖母と連絡が取れず、とても不安でした。1週間ほどしてなんとか現地に入ることができ、祖母の無事を確認。家の前には津波で運ばれた瓦礫が押し寄せ、言葉が出ないほどの大きな衝撃をうけました。

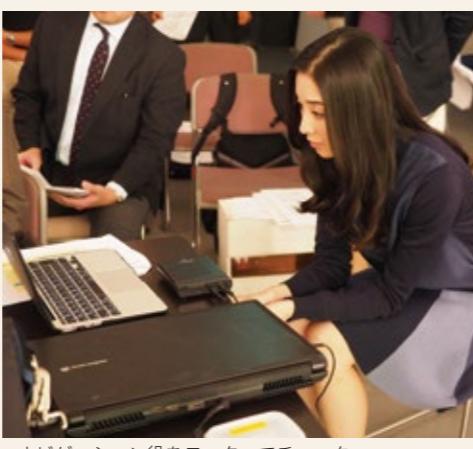
**記憶することと知ることの大切さ……**

防災教育に役立つことの喜び

大船渡には何度も足を運び、個人として復興のお手伝いをしてきました。衣食住の面での不自由が解消されはじめた後には、被災者の皆さんに生活の楽しみを提供できないかと、人と協力して雑貨や手作りの口うるそを扱うフリーマーケットも開催しましたね。

そして2~3年が過ぎ、あれほど全国に衝撃を与えた東日本大震災でさえ、当時と比べると人々の記憶が薄れているように思いました。頃、「女優という仕事を通して、これまでとは違う貢献ができるのか」という思いが湧きあがるようになりました。

そんなとき、日本赤十字社さんから「防災教育プログラム」のナビゲーターのお話をい



ナビゲーション役をモニターでチェック

大船渡には何度も足を運び、個人として復興のお手伝いをしてきました。衣食住の面での不自由が解消されはじめた後には、被災者の皆さんに生活の楽しみを提供できないかと、人と協力して雑貨や手作りの口うるそを扱うフリーマーケットも開催しましたね。

そして2~3年が過ぎ、あれほど全国に衝撃を与えた東日本大震災でさえ、当時と比べると人々の記憶が薄れているように思いました。頃、「女優という仕事を通して、これまでとは違う貢献ができるのか」という思いが湧きあがるようになりました。

そんなとき、日本赤十字社さんから「防災教育プログラム」のナビゲーターのお話をい

大船渡には何度も足を運び、個人として復興のお手伝いをしてきました。衣食住の面での不自由が解消されはじめた後には、被災者の皆さんに生活の楽しみを提供できないかと、人と協力して雑貨や手作りの口うるそを扱うフリーマーケットも開催しましたね。

そして2~3年が過ぎ、あれほど全国に衝撃を与えた東日本大震災でさえ、当時と比べると人々の記憶が薄れているように思いました。頃、「女優という仕事を通して、これまでとは違う貢献ができるのか」という思いが湧きあがるようになりました。

そんなとき、日本赤十字社さんから「防災教育プログラム」のナビゲーターのお話をい



## 女優 伊藤 歩

伊藤 歩 Ito Ayumi

1980年東京都生まれ。13歳の時に大林宣彦監督の作品でスクリーンデビュー。1997年『スワロウテイル』(岩井俊二監督)で第20回日本アカデミー賞新人俳優賞、優秀助演女優賞を受賞。現在は、映画、TVドラマ、舞台、CMと幅広く活躍中。



## 土浦市立都和南小学校

久保田 和美 先生

パキスタン赤新月社メンバーとの  
救急法を通じた交流活動

都和南小学校では、青少年赤十字国際交流事業の一環として、パキスタン赤新月社のJRCメンバー2人を招いて救急法講習会を実施しました。日本人より大人っぽく見えるパキスタンの15歳のお兄さんと17歳のお姉さんと、5年生25名との交流活動を行ったのですが、はじめは児童たちも緊張した様子でした。しか

し、パキスタンの言葉でいさつを教えてもらい、握手を交わすうちに緊張も解け、和やかな雰囲気になりました。

日本赤十字社の指導員の方からは、三角巾(バンダナ)包帯法などの救急法を教えていただきました。すぐに手当てをすることの重要性について説明を聞いた後、2人1組となり、手の甲や指をけがした場合の処置の練習を行いました。バンダナと悪戦苦闘をしていると、指導員の方が手を取ってわかりやすくお手本を見せてくださり、技術の習得はもちろんのこと、友だちとお互いに手当てをし合うことで相手を思いやる気持ちや命を大切にしようとする気持ちが高まり、素晴らしい経験になりました。

「夢は、たくさんの人を救う医師になること。そのために医学の勉強をしています」と話してくれたパキスタンの17歳のメンバー。都和南小の5年生に「人のために生きる」という大きな価値を教えてくれました。

## おすすめ 観光名所

**筑波山**：標高877mとお手軽ですが、わき水が出ていたり、不思議な形の岩があつたり、変化に富んだ楽しい山です。頂上では、夏は冷たいかき氷、冬は暖かいラーメンが味わえます！



## 岐阜県立東濃特別支援学校

佐藤 真保 先生

本校は、岐阜県土岐市(東濃西部)の山間部に位置しています。自然豊かな恵まれた学習環境にあります。一方で、非常変災時には孤立しやすいという課題も抱えています。

そこで、本校では「子どもたちの命を守る」ことを学校教育目標の中核に位置づけ、平成26年度から、児童生徒自らが自分の命を守るための力を育成することに取り組んでいます。

## 「防災・減災教育の取り組み」

本校オリジナルの防災教育プログラムを作成するに当たって、「非常変災時に必要になる力」、「付けておきたい力」について精選し、小学部から高等部までの学年ごとの段階表にまとめまし

た。こうすることで防災・減災に関する各学習が段階的・系統的に行えるようになりました。

また、災害を想定した各訓練では、設定を具体的にしたり、継続的に行ったりすることで適応力や判断力の向上が見られました。今年度は、実際の災害時に近い形で1日を通した訓練「命を守る総合防災訓練」を行いました。校内外の専門家による防災・減災授業、地震を想定した安全確保訓練、備蓄食の試食、引き渡し訓練、留め置き訓練などの実践的な訓練の中で、児童・生徒、職員全員が災害時に取るべき行動について真剣に考えることができました。

こうした防災・減災学習に加え、児童・生徒は、他者との関わりを通して学びも経験してきました。東日本大震災の被災地でボランティア活動を実施した際には、活動を通して関わった方々から話を聞いたり、想像を絶する景色を目の当たりにしたりしたことで、「自分の命を守ろう」「全力で生きよう」と生徒自身が身をもって感じることができました。

このような取り組みを通して、児童生徒一人ひとりが「生きること」と向き合いながら、毎日を生き生きと過ごしています。

## おすすめ 観光名所

臨済宗南禅寺派虎渓山永保寺、土岐プレミアム・アウトレットや、瑞浪市化石博物館(化石発掘体験有)があります。



## 各ブロックの取り組み × おすすめの観光名所

## 日本縦断活動紹介

青森県

全国のJRC加盟校の中から、最新の取り組みを紹介します。JRCを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育んでいる6つの取り組みをヒントに、日ごろのJRC活動や学校生活をますます充実させてください！

山口県

岐阜県

茨城県

沖縄県



「防災教育モデル園」の指定をいただきました。

防災をクローズアップし、園を挙げて取り組む機会をいただけたことは、園にとっても子どもたちにとって非常に貴重なものになりました。未曾有の被害をもたらした東日本大震災などを体験し、家族や友だちと一緒にいられることがどれほど嬉しいことか、住む家があることがどんなにありがたいことなどを改めて感じ、今ここに命があることの幸せや、自分の存在を大切に思う自己肯定感を育んでいきたいと考えました。

園の取り組みとしては、「防災教育年間計画」に基づいて活動を展開してきました。これらを園の活動の指針とともに、毎月「赤十字だより」を保護者と共有することで家庭でも防災について考えてもらう機会としています。

幼児教育の世界では「非認知能力」という言葉が頻繁に取りあげられます。幼児期に大切なのは、自ら感じ、考えて行動できる肉体的、精神的健康であり、それらを十分に発揮できる場が確保されることが、その後の学力や生きる力にも深く関連すると言われています。それらは正に青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」と合致するところです。

これからも、赤十字活動を通してさまざまな学びを得て、明日を担う子どもたちの健全育成を進めていきます。

みどりのかぜエデュカーレ  
(社会福祉法人 みつは会)

田頭 初美 理事長

## 防災教育モデル事業指定を受けて

平成15年の開園と同時に「子ども赤十字」加盟園として歩み始めたみつは会は、赤十字の奉仕と博愛の精神を園の教育・保育の真髄とし、さまざまな活動を行っています。

毎月10日を赤十字の日とし、子ども赤十字の年間指導計画に基づいて、主に一学期には「健康」、二学期には「奉仕」、三学期には「国際理解」を深め、子どもたちの心に思いやりやいたわりの心が芽生えること、心で感じ考えることを大切にしながら子どもたちの大切な命を育んでいます。

そのような中、日本赤十字社より幼児教育施設として全国初の



## おすすめ 観光名所

八食センター：さまざまな魚介や加工品があり、飽きることなく買い物ができます。新鮮な魚介類を使った食事も魅力です。





## 沖縄県立那覇商業高等学校

宮城 政美 先生

### スタセン\*で考えた企画を実行！寸劇で掘んだ仲間との絆

※「青少年赤十字スタディ・センター」の略

本校はJRCの活動を部活動として行っています。主に、日本赤十字社沖縄県支部のJRC高校協議会の活動や活動後の壁新聞作成を行い、現在は防災マップの作成に取り組んでいます。

部員たちは、「まずは、ボランティア活動を楽しむ」ということをモットーに活動しており、元気で賑やかで、いつも笑いが絶えません。

しかし、さまざまな活動を行うなかで失敗することもありました。アイデアは豊富なのですが、実行に移すとうまくいかないことが何度かあったため、実行した後は必ず振り返りを行うようにしたところ、「伝える難しさ」が課題として挙がりました。シミュレーションをしたり、司会のシナリオを作成したりと、部員たちが試行錯誤を繰り返すなかで考案したのが、寸劇を用いて発表を行うことでした。これは、県外で開催されたJRCの研修に参加した際に、他県の先生方からトレセン（青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター）のまとめなどでHRごとに寸劇を行っているという話を伺ったことがきっかけです。

県内で開催しているトレセンの最終日のワークショップ発表を、「寸劇でわかりやすくしよう」と部員たちに持ちかけたところ、初めのころは恥ずかしがっていましたが、徐々にさまざまな案が出るようになり、上達してきています。また、県内の青少年赤十字大会でも、寸劇で活動優秀校としての活動発表を行いました。

まだまだ完成度は低いのですが、次の一步を踏み出すことができました。

この場を借りて、ご指導して下さった指導者協議会の先生方、赤十字関係者の皆さんにお礼申し上げます。

#### おすすめ 観光名所

琉球ガラス村：沖縄の観光品の琉球ガラスを作る体験ができます。また、青の洞窟は、光の反射で海水が青く映って見えてきれいな場所です。



#### 企画を成功させた2人の感想

那覇商業高等学校2年

玉城 瀬梨奈

私は、スタセンのワークショップで「世界の紛争について劇を行う」を目標にしましたが、残念ながら実行できませんでした。しかし今回、青少年赤十字大会の発表の場で部活の活動報告を寸劇で行うことができました。みんなで作り上げた寸劇をたくさんの方々に見てもらい、これまでやってきたさまざまな活動を知つてもらうことができました。これまで積み重ねてきた練習のおかげで、成功させることができたのだと思います。今後も、絆を大事にしてさまざまな活動をがんばっていきたいです。

那覇商業高等学校2年

鹿川 鈴葉

スタセンで考えていた寸劇を、青少年赤十字大会で本校の活動報告として行いました。観客の皆さんも、フォークダンスのシーンで手拍子を合わせてくれるなど、楽しんで見てくださいました。寸劇は、楽しく聞くことができ、内容も読み取りやすいので、これからも挑戦してみたいと思いました。

#### スタセンで2人を指導した先生からのメッセージ

愛知県立瀬戸北総合高等学校

今井 伸哉 先生

玉城さんは、自分が目にしたもの、抱いた想いを地元に帰ってから実行できるよう演劇を企画しました。活動で大切なことは必要性を感じることだとスタセンで学んだようです。指導者として、彼女たちのその後の活動を聞くと自分も負けていられないなと思います。

花巻東高等学校

伊藤 亮 先生

鹿川さんは、演劇で世界の現状や人道についてみんなに知ってもらいたいと企画を考えていました。実際に実行する場面を一つひとつイメージしながら、5W1Hを丁寧に考えていたことが印象に残っています。失敗を恐れずに、自分の伝えたいことを思い切り表現して欲しいです。



## 和歌山市立大新小学校

松田 晃 校長

### 大新小学校における青少年赤十字活動について

大新小学校の朝は、リーダーの育成と仲間意識の高まりをめざす全校縦割り活動の「なかよしマラソン」で始まります。8グループの各担当教員がグループ内の児童の健康チェックを行い、6年生のリーダーを先頭に音楽に合わせて歩きはじめます。音楽が変わると1年生のペースを考えながらジョギングで走り、さらにアップテンポの曲に変わると自分のペースで最後まで走ります。雨の日や運動場の状態が良くない日は、マラソンができないた

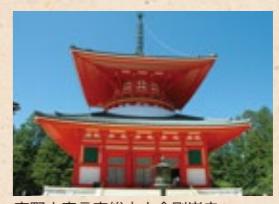
め、校舎内で「なかよし遊び」を行います。1年生から6年生までみんなが楽しくできる遊びをリーダーたちは考え、時には相談しながら仲間意識を高めています。

また、学年ごとに分かれて分担区域の清掃も行っています。6年生は、校舎内だけでなく、隣接する大新公園のサクラ道の清掃も行い、地域の方々に喜んでいただいている。朝の会では必ず青少年赤十字の誓いの斉唱から始まり、青少年赤十字の一員であることを確認しています。

本校の6年生は、下級生のお世話を一生懸命にします。やさしくされた下級生は、必ずやさしい上級生になります。下級生にとって6年生はあこがれの存在であり、自分たちもやがてはそんな6年生になりたいと考えるようになります。これが大新小学校の伝統となっていて、その基礎になっているのが青少年赤十字活動なのです。

#### おすすめ 観光名所

ユネスコ世界遺産にも登録されている高野山や那智の滝、紀州徳川家の居城である和歌山城など、じっくりと観光できるスポットがたくさんあります。



## 山口市立大殿中学校

林 直幸 先生

### 地域とともに—OTK大殿地域に貢献し隊—

本校では、生徒会活動の一環として、地域のさまざまな行事にお手伝いとして参加する「大殿地域に貢献し隊」(OTK)活動に取り組んでいます。メンバーは固定されておらず、行事ごとに希望者を募って行うOTK活動を通じ、JRCの実践目標のひとつである「奉仕」に、積極的に取り組んでいます。

具体的には、地域の体育行事や敬老会などの運営補助や、小学生の夏休みの宿題のお手伝いなどに取り組んでいます。また、校区内には歴史的な建造物が多く、伝統的なお祭りなども行われており、こうした地域行事にも積極的に参加しています。

実際の活動では、地域の方々が先生役になります。そうした交流のなかで、行事の運営や地域に関する知識だけでなく、コミュニケーション能力や積極性、協調性などさまざまなことを吸収しています。学校では遠慮がちな生徒も、OTKでは活動的な姿を見せています。

また、地域の方々から感謝の言葉をいただくことで、自己有用感や達成感などを味わうこともできているようです。このような機会を提供してくださる地域の皆さんには本当に感謝しています。

今後の課題としては、いかに主体性を持って行事に参加するかという点が挙げられます。「参加者」という意識から一步踏み出し、地域の特徴や長所などを把握し、自分たちの考えやアイデアで地域に還元されることになること。こうした活動の過程こそがJRCの態度目標である「気づき、考え、実行する」を体現することではないかと考えます。

OTKでの経験を経て、やがて彼らが地域づくりの「参加者」から「当事者」となることを願っています。

#### おすすめ 観光名所

下関市の「角島」：全国的にも海がきれいな名所で有名で、CMなどで起用されているスポットです。



## 書籍紹介

### 学習まんが歴史で感動！



### ポーランド孤児を救った日本赤十字社

著者  
企画・構成・監修 加来 耕三  
原作 水谷 俊樹  
作画 北神 謙

出版社：ポプラ社

発行年：2016年11月

「学習まんが歴史で感動！」シリーズは、「感動」をキーワードに日本と外国の友好のエピソードを取り上げるシリーズです。シリーズ2巻目となる本書では、日本とポーランドの知られざる歴史秘話を描きました。

舞台は今からおよそ95年前のシベリアから始まります。当時シベリアには、戦争やロシア革命により始まった内戦から逃げてきたポーランド人が、10万人以上いたといわれています。難民と化した彼らは、極寒のシベリアで飢餓や疾病により、次々と命を落としていきました。なかには、母に抱きついたまま凍死した幼子もいたといいます。この悲劇を食い止めようと立ち上がったのが、外務省の要請を受けた日本赤十字社でした。

日本赤十字社は1920(大正9)年と1922(大正11)年にかけて、ポーランド孤児765人を日本に迎えました。もちろん、救助には多額の費用と手間がかかりましたが、当時の日本人は、子どもたちをわが子のように温かくもてなしたといいます。そして、ポーランド孤児たちはその感激を忘れず、帰国後も日本への友情を持ち続けたのです。

人びとの「善意の心」から生まれた知られざるポーランドとの友情。日本人であることに誇りを持てる、そんな心温まる物語です。

ポプラ社 編集担当 大塚 訓章



〈表紙協力〉  
JRC加盟校  
佐賀県立唐津東高校 科学部の皆さん

### 青少年赤十字指導情報 編集担当者から

近年、国内外では地震をはじめ、大規模な災害が継続的に発生しており、防災教育への関心も高まっております。平成28年1月に国内の小学校から高等学校を対象に実施した青少年赤十字防災教育プログラム「まもりのいのちひろめるぼうさい」のアンケートによると、既に21%の学校で同教材を授業で活用したことが判明しました。現在は、幼稚園や小学校低学年向けの防災ゲームの開発を進めています。読者の皆さまのご意見も積極的に取り入れたいと思いますので、お気づきの点があればご指摘ください。

## 青少年赤十字(JRC)とは

### はじめ

#### 子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙やプレゼントなどを赤十字を通じて届けました。これがきっかけとなり、青少年赤十字が誕生することとなります。

#### 人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟(現在の国際赤十字・赤新月社連盟)は1922年に青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校(現在の守山市立守山小学校)に誕生した「少年赤十字」から数えて90年以上の長い歴史をもっています。

### 青少年赤十字が 大切にしていること



### 青少年赤十字の導入・ 活用のメリット



#### 赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

青少年赤十字の活動は、子どもたちの思考力・判断力・表現力を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

加盟校数 1万 3,654 校

メンバーアイ 326 万 9,493 人

加盟校数・メンバーアイともに2016年3月現在

全国47都道府県のすべてにある日本赤十字社の支部が、教育現場での青少年赤十字活動を、ご要望に応じてきめ細かくサポートします。加盟登録の方法や、各種教材の貸出し、講師の派遣などに関する詳細をご希望の場合は、お近くの支部の青少年赤十字担当者へお気軽にお問い合わせください！

日本赤十字社(都道府県名)支部

検索

『青少年赤十字指導情報』は、日本赤十字社のホームページからダウンロードすることもできます。  
<http://www.jrc.or.jp/activity/youth/document/>



青少年赤十字の目的やメ  
リットを詳しく紹介してい  
るパンフレット。  
(日本赤十字社静岡県支部の例)